

小学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員名簿

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・低学年	文京区	指ヶ谷小	高崎 裕之
	北区	赤羽小	○原 京子
	荒川区	第七峡田小	◎勝倉美恵子
	練馬区	谷原小	山下由紀子
	江戸川区	下鎌田西小	春田 静子
	小金井市	小金井第二小	長谷川明子
	国立市立 東久留米市	国立第二小 第六小	浅尾 文 鳩山 亮子

	地区名	小学校名	氏名
児童会活動	板橋区	弥生小	大久保聡子
	足立区	扇小	○神原 尚之
	八王子市	元八王子東小	山口美智子
	青梅市	藤橋小	高田 修
	小金井市	小金井第三小	真壁 玲子

	地区名	小学校名	氏名
学級活動・中学年	品川区	原小	水上美穂子
	大田区	矢口小	○堀部加容子
	世田谷区	花見堂小	山下 潤子
	足立区	島根小	遊馬伊都子
	保谷市	東伏見小	持田 裕代

	地区名	小学校名	氏名
学校行事	江東区	臨海小	小林佐和子
	杉並区	第十小	有浦 道隆
	青梅市	吹上小	大野 明彦
	調布市	国領小	○吉田 茂明
	東村山市	回田小	二木 一郎
	稲城市	向陽台小	木原 伸彦

	地区名	小学校名	氏名
学級活動 高学年	台東区	平成小	野口 容子
	墨田区	第四吾妻小	安田 潤子
	大田区	池上第二小	田谷 浩
	世田谷区	赤堤小	丸山とも子
	練馬区	大泉第六小	狩野 都
	葛飾区	西亀有小	○清水 晶子
	江戸川区	下鎌田小	小川 幸恵
	府中市 多摩市	府中第三小 北永山小	藤本 顕之 上原由紀子

◎ 全体世話人 ○ 分科会世話人

担当 教育庁指導部主任指導主事 近藤 精一

平成7年度 教育研究員（特別活動）研究主題
 互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団活動を通して
 児童の自主的・実践的態度を育てる指導

目 次

I	研究の概要	2
II	みんなでつくる楽しい学級活動の工夫 <div style="text-align: right;">（学級活動低学年分科会）</div>	3
	1 主題設定の理由 2 研究仮説と仮説検証の視点	3
	3 研究仮説の視点	4
	4 研究内容	5
	5 まとめと今後の課題	6
III	よさを認め合い、意欲をもって取り組む学級活動 <div style="text-align: right;">（学級活動中学年分科会）</div>	7
	1 主題設定の理由 2 研究仮説と仮説検証の視点	7
	3 研究内容	9
	4 まとめと今後の課題	10
IV	心おどる学級活動 <div style="text-align: right;">（学級活動高学年分科会）</div>	11
	1 主題設定の理由 2 分科会主題のとらえ方	11
	3 研究仮説と仮説検証の視点	12
	4 研究内容	13
	5 まとめと今後の課題	14
V	全校児童の関心と参加意欲を高める代表委員会の指導の工夫 <div style="text-align: right;">（児童会活動分科会）</div>	15
	1 主題設定の理由 2 研究仮説と仮説検証の視点	15
	3 研究内容 実践事例1, 2, 3	16
	4 まとめと今後の課題	19
VI	「やって良かった」と思える学校行事の工夫 <div style="text-align: right;">（学校行事分科会）</div>	20
	1 主題設定の理由 2 研究仮説と仮説検証の視点	20
	3 研究内容 実践事例1, 2, 3	21
	4 まとめと今後の課題	24

I 研究の概要

共通研究主題

互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団活動を通して

児童の自主的・実践的態度を育てる指導

今日の科学技術の進歩と経済の発展は、物質的に豊かな生活を生むとともに、情報化、国際化、核家族化、高齢化、少子化等の現象が生じ、社会状況は一変しつつある。これらの変化は、子供相互の人間関係や仲間関係の希薄、体験を通じた活動の不足など、子供たちの生活に大きな影響を及ぼすとともに、子供のものの見方や考え方にも大きな影響を与え、特別活動が目指す、「望ましい集団活動を通じた自主的、実践的な態度を育成すること」への大きな阻害要因として立ちはだかりつつある。

特別活動部会では、こうした社会背景や子供の置かれている状況を強く認識するとともに、互いのよさを生かし、認め合い、高め合う集団の育成を図り、指導の自主的・実践的な態度を育成することが急務の課題であると考えた。そして、その課題の解決のためには、望ましい集団活動や様々な役割分担などの体験を通して、児童一人一人のよさや可能性を発揮する場を確保し、互いに協力し合って、自分たちの学校や学級生活を向上させようとする自主的・実践的態度を育成することが必要であると考えた。

また、特別活動が、「為すことによって学ぶ教育活動」という特質を持つことの意味を最大限に生かした活動を展開することが、社会の変化に主体的に対応したくましく生きていくことのできる人間の育成につながることを確信し、本研究主題を設定した。

以上の研究主題設定の理由を基に、本年度は下記のことに重点を置いて研究することにした。

- ・ 児童が課題意識をもって取り組み、互いの活動や役割を認め合い、励まし合える人間関係を育成すること。
- ・ 望ましい集団の活動を通して、自分のよさを自覚するとともに、そのよさを集団の中で相互に認め合い、励まし合い、高め合っていくことが可能となる場の設定や支援の在り方を工夫すること。
- ・ 一人一人の児童の活動の様子をつぶさに観察し、児童自身の自己実現へ支援をすること。

なお、研究を進めるに当たっては、各分科会が、次のような研究主題を設定し、共通研究主題に迫ることにした。

- ・ 学級活動低学年分科会 「みんなでつくる楽しい学級活動の工夫」
—— 話合い活動を通して ——
- ・ 学級活動中学年分科会 「よさを認め合い、意欲をもって取り組む学級活動」
—— 事前から事後までの一連の指導を生かして ——
- ・ 学級活動高学年分科会 「心おどる学級活動」
- ・ 児童会活動分科会 「全校児童の関心と参加意欲を高める代表委員会の指導の工夫」
- ・ 学校行事分科会 「やって良かったと思える学校行事の工夫」

Ⅱ 「みんなでつくる楽しい学級活動の工夫」 —— 話し合い活動を通して ——

(学級活動低学年分科会)

1 主題設定の理由

低学年の児童の特徴として、何にでも興味関心をもち、いろいろな活動に積極的に取り組むなど意欲的な生活態度がみられるようになる。しかし、一方で自己中心的な傾向が強く、友達関係も希薄でメンバーも一定していない。また、遊びや活動場面では、生活経験が不足し、社会性が十分に育っていないため、ちょっとしたことでいさかいになることもある。

したがって、この時期の児童には、学校という大きな集団での生活を通して、少しずつ身の回りのことに気づき、一人一人が問題について自分の意見を持ち、友達の意見も聞きながら、話し合い、実践していくことができるという経験を積ませることが大切となってくる。

そこで、児童が自分たちの生活について話し合って改善していくためには、「互いのよさを生かし、認め合い、高め合う」学級集団をつくっていくことが大切であり、そのためには学級活動を「みんなでつくる」という視点と、「楽しく活動できる」という視点で取り組むことが大切であると考えた。この視点に立って話し合い活動を工夫改善することによって学級活動への参加意欲が高まり、自主的実践的態度が育つと考え、本研究主題を設定した。

2 研究仮説

「みんなでつくる楽しい学級活動」を次のようにおさえた。

—— みんなでつくるとは…… ——

- ・話し合いの進行役がだれでもできる。
- ・議題（題材）について理解している。
- ・議題（題材）について自分の考えをもつ。
- ・自分の考えを表現する。
- ・友達の意見を聞き、認め合う。
- ・よりよい方法をみんなで見つけ出す。
- ・決定にそってみんなで協力して実践する。

—— 楽しく活動できるとは…… ——

- ・お互いに何でも安心して言える。
- ・すすんで参加できる。
- ・自分たちが決めたものができる。
- ・責任をもって実践し、成就感をもつ。
- ・参加してよかったという満足感がある。

「みんなでつくる楽しい学級活動」にするためには、自分の考えが先生や友達に大事にされているという実感をもつことが大切である。

また、話し合い活動では、自分たちの学級の問題を学級全体で話し合ったり実践したりする中で解決していくことがわかり、そのために自分の意見を持ち、友達の意見も聞きながら、お互いを認め合う関係を作ることが大切であるとの認識に立ち、次の仮説を設けた。

—— 研究仮説 ——

議題についての自分の考えを持ち、友達の意見を大切に考え、よりよい方法をみんなで見つけ出し、実践することができるような指導を工夫すれば、楽しい学級活動を作り出すことができる。

3 仮説検証の視点——指導の重点を、学級会グッズに置き、以下の工夫をした。

【視点1】 自分の考えを持たせるための工夫

○事前に議題について知る……学級会コーナー、朝の会や帰りの会の活用、
話し合いのたねカード

○議題についての自分の考えをまとめる：学級会カード

【視点2】 友達の意見を大切にさせるための工夫

○友達の意見を認める…学級の雰囲気作り

○友達の意見を聞く……各教科・領域の中で・聞き上手カード

【視点3】 問題を解決させるための工夫

○話し合いの進め方を知る……輪番による司会・話し合いグッズ
進め方のパターン

○司会グループの役割を明確にする……司会グループ用グッズ

○発表の仕方を知る……発表の仕方のパターン

○自分の意見に固執せず、議題の解決に向けて修正できる

○終末の助言……教師の具体的な評価

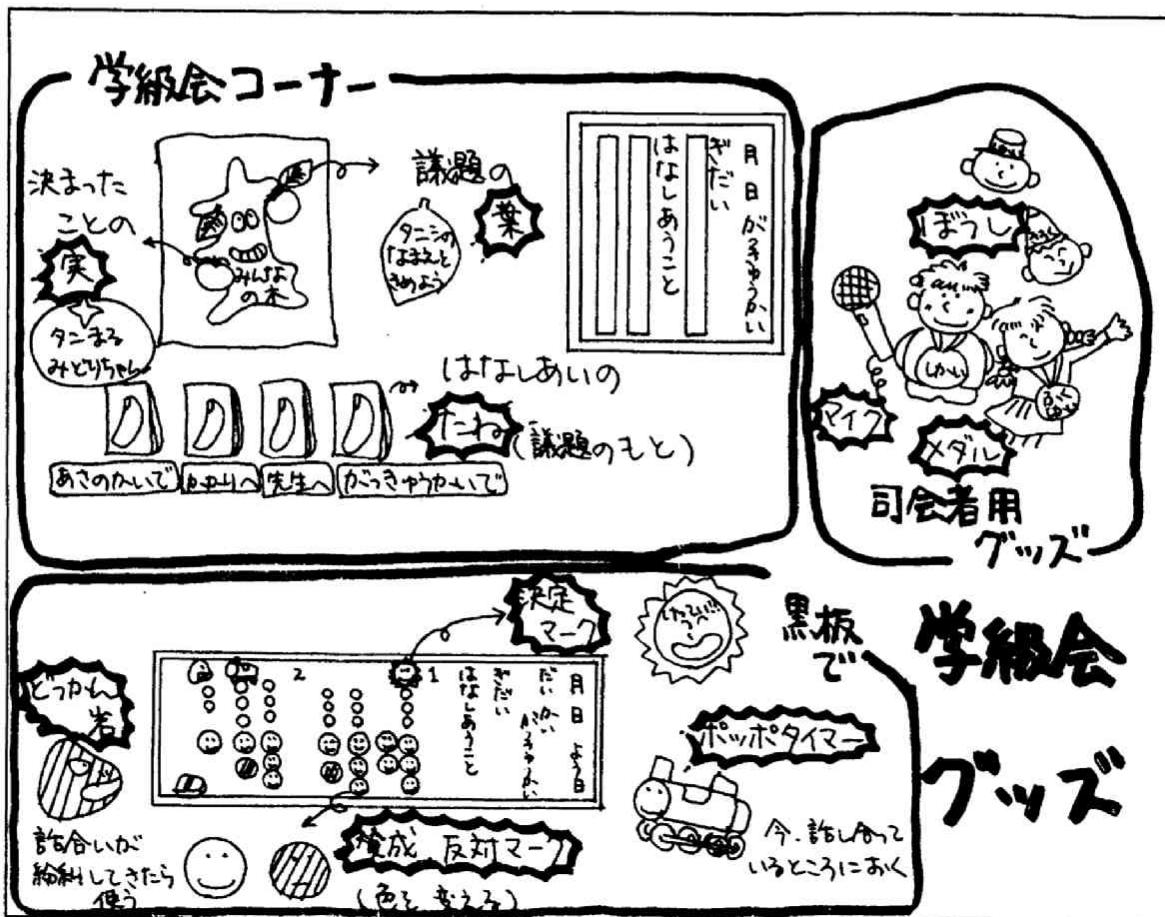
○座席の工夫

【視点4】 実践での工夫

○決まったことを共通理解する……学級会コーナー

○役割を決めて協力して実践する……実践場面での教師の支援

○次への活動の意欲をもつ……実践に対する励まし



4 研究内容

実践事例 1年 議題「みんなで楽しく遊ぼう」

【視点1 自分の考えをもつようになるための工夫】

- ・話合いのたねカードを全員に書き、クラス全員で議題を決める。
- ・学級会コーナーに議題、話合いの柱、司会グループを掲示する。
- ・学級会カードに自分の考えを書く。

【視点3 問題を解決することができるようになるための工夫】

- ・司会グループに学級会の進め方を知らせる。
- ・話合いグッズを活用し、問題点をわかりやすくする。
- ・黒板を見ながら進行できるような位置に、司会グループの座席を配置する。

<活動の概要>

司会グループは、手作りの司会者用バッチをそれぞれ胸につけ、学級会グッズを準備したり、黒板に議題カードや柱立てカードなどを貼ったりして、学級会が始まる前から意欲的に取り組んでいた。

話合いは①何をして遊ぶか②どうやって遊ぶかの2つの柱立てで行った。

柱立て①では、学級会カードを使い、事前に自分の考えをまとめておいたので、子どもたちは、進んで手を挙げ意見を発表することができた。司会は、進め方のパターンに沿って進めたので、混乱もなく、落ち着いて大きな声で進めることができた。黒板記録は、教師が短冊に書いたものを黒板に貼ったので、無理なく、余裕をもって活動することができ、進进行を助けた。賛成・反対意見を発表する場面では、手作りの賛成マークが黒板に貼られるたびに、子ども達は大きな関心を示していた。賛成の理由は、「おもしろいから」「楽しいから」というワンパターンな発言に偏ってしまったが、同じような意見でも、手を挙げて発言すれば、賛成マークが貼られるので、自信のない子どもでも安心して参加することができた。また、黒板の賛成マークの状況を見ることにより、他の意見に変わっていく子ども数名見られた。

まだ学級会グッズを使い始めてから日が浅いため、黒板記録の子どもが使い方に戸惑ったり、まちがえて使ってしまった場面も見られた。しかし今、何を話し合っているのか、どの意見に固まりかけているのか、どの意見に決まったのかを視覚的にとらえることができ、どの子どもも楽しみながら意欲的に参加することができた。

柱立て①では、「たかおに」をすることに決まり、柱立て②では「すぐに決められるから」という理由で日直が最初の「おに」をすることに決まった。

<考察>

自分たちが書いた話合いのたねをもとにした議題であり、児童は議題を自分たちのものとしてとらえることができた。学級会カードに事前に自分の考えを記入したため、積極的に意見を言うことができた。司会グループは、学級会グッズをととても喜び、それを使うことによって役割が明確になり、自信をもって活動することができた。学級会グッズを自分達で工夫してつくることにより、学級会への興味・関心が高められた。

5 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

- ・ 学級会コーナーの設置や学級会カードを事前を書くことにより、何を話し合うかがよくわかり、学級会をやってみたいという意欲が高められた。
- ・ 話合いのたねカードから議題を見つけていくことによって、自分達が考えたことが実現できていくことを経験させ、学級会を児童自身のものにしていくことができた。
- ・ 聞き上手カードを掲示し、友達の意見をよく考えながらしっかり聞こうとする姿勢が見受けられるようになってきた。
- ・ 児童からのアイデアで話合いグッズがつくられることにより、学級会への興味関心が高められ、楽しく学級会ができるようになってきた。
- ・ 輪番制による司会グループは、グッズを使用したり、その役割を明確にすることにより、自信をもって活動できるようになってきた。
- ・ 様々な実践を工夫しながら行うことにより、みんなで協力して楽しく活動できたという満足感をもたせることができた。

(2) 今後の課題

- ① 児童が議題について理解し、自分の考えをもち、意欲的に話合いに参加するには、話合いのたねカードに記入している事柄をどう議題として取り上げていくか、話合いの柱を何にするかを十分検討する必要がある。
- ② 発言することに多くの児童が満足しているが、今後は短時間で深まりのある話合いができ、話し合ったことを早く実践できるように指導の工夫をしていくことが大切である。
- ③ 学級会グッズによる楽しい学級活動から、話合いの内容による楽しさへと質的向上をはかるためにどう指導していくかが課題である。

司会者カード

司会の子が持つ

話合いのたねカード

(右側はこどもに返す)

も学級会カード

各自が重ね貼りして持っている

Ⅲ よさを認め合い、意欲をもって取り組む学級活動 —— 事前から事後までの一連の指導を生かして ——

(学級活動中学年分科会)

1 主題設定の理由

中学年の学級活動の実態を振り返ると、「楽しい」と答える子供がほとんどである。それは何事にもやる気があり、活気があふれていることに根ざしていることと考えられる。そうした中で、意見は言いたいと言いが分からない子供、発言に自信がもてない子供、司会はやってみたいが、どのように進めていけばよいのか戸惑う子供もいる。また、話し合いの中で自分の意見にこだわったり、相手の考えをよく確かめずに、友達の意見に反対してしまったりすることもある。

これらのことは、子供が自主的に活動し、学級の一員としての所属感に満ちた学級集団をつくるうえでの課題として、本分科会では受け止めている。

この課題について、子供たち一人一人を教師も子供も互いにかけてえのない一員としてとらえることを、本研究の原点におき、事前・事中・事後の一連の具体的な支援を工夫することにより、子供同士がかかわり合う活動を通して、子供自ら互いのよさに気づき、認められることに自信をもち、進んで学級の一員として活動するようになると考え、本研究主題を設定した。

2 研究仮説と仮説検証の視点

子供が自ら願いや希望をもち、それらを互いに共有し合うことは、互いの良さを認め合い、次の活動への活力につながる。一連の活動を通して、子供相互のかかわりを認め支援していくことが求められている。

これらの実践を積み重ねることにより、子供自らが互いのよさを学級生活に生かすようになると考え、下記の研究仮説を設定した。

研究仮説

子供主体の活動を通して、自ら互いの考えを学級全体に生かすような支援を工夫すればよさを認め合い、意欲をもって取り組む学級活動になるだろう。

仮説検証の視点

<p>視 点</p>	<p>視点1 意識づけの工夫</p>	<p>視点2 友達のよいところを見つけ 認める場の工夫</p>
<p>視 点 の 捉 え 方</p>	<p>一人一人が学級活動に意欲的に取り組むためには、事前、事中、事後の一連の活動の中で、自信をもって、よさを発揮できるように工夫することが大切だと考えた。</p>	<p>学級活動の一連の活動の中や、その他の場面で、友達のよいところを見つけ認める場を設定することで一人一人が自信をもち、よさが発揮されると考えた。</p>
<p>方 策</p>	<ol style="list-style-type: none"> 活動についての見通しをもち、イメージを膨らませる工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①計画委員会を充実し、自信をもって司会ができるようにする。 ②学級活動ノートに自分の考えをまとめてから、会に望む。 ③話し合い当日の様子がわかるように、楽しみに待つような掲示物やコーナーを工夫する。 一人一人の考えを、全体に生かす工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①一人一人の願いや考えを大切にできるような議題を考える。 ②ねらいにそった話し合い活動になるように支援する。 ③一人一人、グループの考えを生かすように話し合いをすすめる。 ④一人一人の考えを生かすように座席の工夫をする。 役割分担を明確にし、一人一人の良さを生かす工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①司会グループなどの役割を明確にする。 ②話し合い後の活動での役割を明確にする。 	<ol style="list-style-type: none"> 計画・準備の過程での工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①カードをみて、一言励ます。 普段意見が言えない子がめあてにそったことをかいていたなら、自信をもって言えるよう声をかける。 ②指導計画をたて、活動に見通しをもつ。 実践の過程での工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①議題やねらいにそった活動になるよう支援する。 ②動的な活動をとり入れることにより、互いに共感しあえる内容にする。 評価の過程での工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①会の最後に友達のよかった点を認め合う。 ②教師がカードに認める言葉を書いて返す。 学校生活全体の場での工夫 <ol style="list-style-type: none"> ①朝の会、帰りの会でもよかったことを報告しあう。 ②友達や係のがんばっているところを認めたり、感謝したりする気持ちをカードに書いて掲示したり、渡したりできるようにする。

3 研究内容

(1) 実践事例 3年 議題「3年2組 雨の日クラブを作ろう」

視点1及び2 意欲づけの工夫・友達の良いところを見つけ認める工夫

<活動の概要>

お楽しみ係が提案した20分休みの全員遊びが季節がら雨の日が多く、予定通りにいかないことが続いてしまった。

そこで「雨の日の遊びを考えよう」との提案になった。まず「雨の日の休み時間のすごし方」のアンケートを取り、それをもとにどんな遊びがしたいかを発表してグループ作りの意欲づけをした。またみんなで楽しく雨の日に室内で遊ぶにはどんなことに気が付いたらよいか話し合い、「雨の日クラブ」の約束にした。



本時は、一人一人の考えが生かせるグループを作り、発表会形式による掲示にし、自信をもち、進んで発表できるよう「発表カード」に役割分担とめあてを書き込んで会にのぞんだ。広い多目的室で発表しやすいよう、グループごとにテーブルに座り、十分相談したり、短時間で分かりやすく発表したりできるよう工夫した。

<考察>

季節に合った雨の日の遊びの工夫という議題を取り上げ興味をもって話合うことができた。

まだ、雨の日クラブの約束をはっきりさせたことでクラブ活動内容がより具体的になり、仲間と声をかけ合い楽しく発表会の準備ができた。さらに発表会での役割を分担し、「発表カード」にめあてを書き、取り組むことで、活動意欲が高まった。友達の良いところの発表を取り入れることで、日頃自分の意見を発表することが苦手な子供も友達の意見に耳を傾け、最後に良いところを見つけ、発表できるようになった。

「やってみたいと思ったクラブ」の発表ではそれぞれのクラブの良さを見つけたり、自分の中に取り入れていこうとする姿勢が見られた。また活動実践の中で、自分たちのクラブだけでなく他のクラブに入って遊ぶことにより互いの良さを認めることができた。さらに、となりのクラスの仲間入りや校内での広がりがあった。

(2) 実践事例 4年 議題 「ちとせ会との交流会ーゲートボールをしようー」

視点1 意欲づけの工夫

<活動の概要>

地域のお年寄りのグループ「ちとせ会」との交流会を開き、一緒にゲートボールをしよう！という提案がありみんなで話し合ったところ、「ちとせ会の人たちに喜んでもらえるような会にしたい。」ということになった。

そこで、一人一人が意欲をもって取り組めるように、また、ちとせ会の方とも親しみをもって接することができるように、全てグループで役割分担しすすめていった。プログラムの大きな流れに合わせて①にこやかにお迎え②楽しくゲートボール③なかよく会食④さようならまた会いましょう⑤ア



ルバム作成の5つに分けて、提案から当日の活動までを行った。

本時は、①のお迎え係からの提案について話し合い、グループが考えたことをもとに、さらに楽しい会が運営されるように工夫した。

<考察>

グループごとに、提案から実践まで責任をもって行ったので、一人一人のやるべきことが明確にされ、意欲をもって取り組むことができた。そして、それぞれのグループで考えた内容がプログラムとなって提示されたので、見通しをもって活動できた。

ちとせ会の方々もそれぞれのグループに入り、手作りの名札をつけたので「〇〇さん」とまるで自分のおじいちゃんのように親しげに接し、肩をたたいてあげるなど温かい姿を見ることができた。

また、この会の後、「矢口フェスティバル」において、全校児童にもゲートボールを体験してもらい、ちとせ会の方々との触れ合いを広めることができた。

4 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

①視点1 意欲づけの工夫

計画委員会を組織し、話し合い活動のための事前の活動をすることにより、司会、記録、運営に見通しをもつことができた。同時に全員が学級活動カードに自分の考えをまとめる機会を設定することにより、実践の場において、議題の解決や題材への努力に向かって、一人一人の考えが学級に反映するようになった。その結果、学級生活への課題意識も、高まった。

さらに、一連の活動の場において司会グループや各場面での活動の役割を担うことにより、子供が学級の一員としてその役割を果たそうと努力するようになった。

②視点2 友達の良いところを見つけ、認める場の工夫

学級活動カードを工夫し、「学級活動を楽しむために」という話し合い活動に取り組む実践的態度を培うための資料を作成した。各活動の中で、それを活用することにより、子供一人一人が互いに議題や題材、ねらいにそって協力し合い、見通しをもって活動するようになった。さらには、こうした活動を学校生活全体に生かす場を担任が確保することにより、互いによいところに気づき、認め合い、高め合うようになってきた。

(2) 今後の課題

子供一人一人の願いや希望、考えを生かした学級活動にするためには教師の支援は不可欠である。

○一連の活動の中で、できるだけ多くの子供の考えを反映させる支援

○子供一人一人の発達段階や個人差を配慮した支援

○子供相互が心を通わせながら活動することができる支援

○限られた時間数の中で、子供が見通しをもって活動することができる支援

以上4点の視点をさらに深めていくことで、他の学習活動の場面にも生かしていくようにしたい。

IV 心 お ど る 学 級 活 動

(学級活動高学年分科会)

1 主題設定の理由

5, 6年生の児童は、小学校の最高学年として、低学年から培われてきた学級集団としての意識が最大限に高まる時期である。学級活動の充実と向上に関する諸問題への取り組みや解決が自主的、実践的に行える年齢である。

しかし、学級内の諸問題を児童自身が見いだして解決し実践できた喜びを味わってきた経験が少ない現状がある。その理由として3つある。

1つ目は、児童をとりまく「豊かな生活」である。「もの」に関して何も不自由な思いをせず、満たされた生活で育ってきた児童にとって、自ら身の回りの問題に気づき、解決していこうとする欲求は、育ちにくい。

2つ目は、時間の余裕がないことである。帰宅後、塾や習い事で時間に追われる生活をする児童は多い。受験希望の児童は、5, 6年生になるととりわけ忙しくなる。そのため、みんなで何かに取り組もうとする余裕がなくなりがちである。

3つ目に、人間関係の希薄化が挙げられる。放課後の遊び場が限定され、仲間と思いきり遊べる広場があまりない。すでに児童の生活の一部になっているファミコンは、様々な人間関係を経験できる要素が少ない。かつて、遊びを通して自然に学んだ仲間意識も、今は育ちにくい。

しかし、児童は、以上のような現状に満足している訳ではない。「もっといいクラスにしたいな。」とか、「みんなで楽しいことをやりたいな。」とかの願いをもっている。これらの児童の願いを自分たちの力で実現していく喜びは、学級活動の時間により多く味わうことができ、児童の主体的な活動を生み出していくものとする。

そこで本分科会では、課題を見つけ実践するまでの活動において、児童がさらに生き生きと心弾ませながら、期待感、満足感をもって取り組める「心おどる」学級活動を目指すこととし、本主題を設定した。

2 分科会主題のとらえ方

「意見が言いたい。」「早く話し合いたい。」「もっと知ってもらいたい。」「絶対やってみたい。」「よし、決まった。」「もっと、何かやってみたい。」等々の心の高まりを、学級活動の中で、児童一人一人に多くの場面で一瞬でもいいから感じ取ってほしいと願っている。なぜなら、このような心の高まり、つまり物事に対してのより強い期待、満足感が、さらにその後のより自主的、実践的活動を生むと考えるからである。本分科会では、この心の高まりを「心おどる」状態であるにとらえた。尚、このような「心おどる」状態を生み出す根本には、共通研究主題の「互いのよさを生かし、認め合い、高めあう」集団活動であることが、不可欠である。

さて、このような、心おどることは、教師や第三者が教えることのできないものである。一人一人の児童が「実感」するものである。支援者である教師の役割は、「心おどった」と感じ

させる手立てを整えることが大切である。

そこで、本分科会では、その手立てをまず、より切実な議題を発見し、その議題について、話し合いが「待ち遠しい」と感じるような事前の活動を充実させる必要があると考えた。そして、互いのよさを生かし合う話し合いを展開し、「よし、決まった。」という満足感を体験させる。さらに、実践では、「わあ、やれた。」と満足感が得られる活動の工夫をする。これらのことにより、次の学級活動への期待感は、より高まり、「心おどる」状態を多くの場面で感じることができるようになるだろう。以上のことから研究仮説をつぎのように設定した。

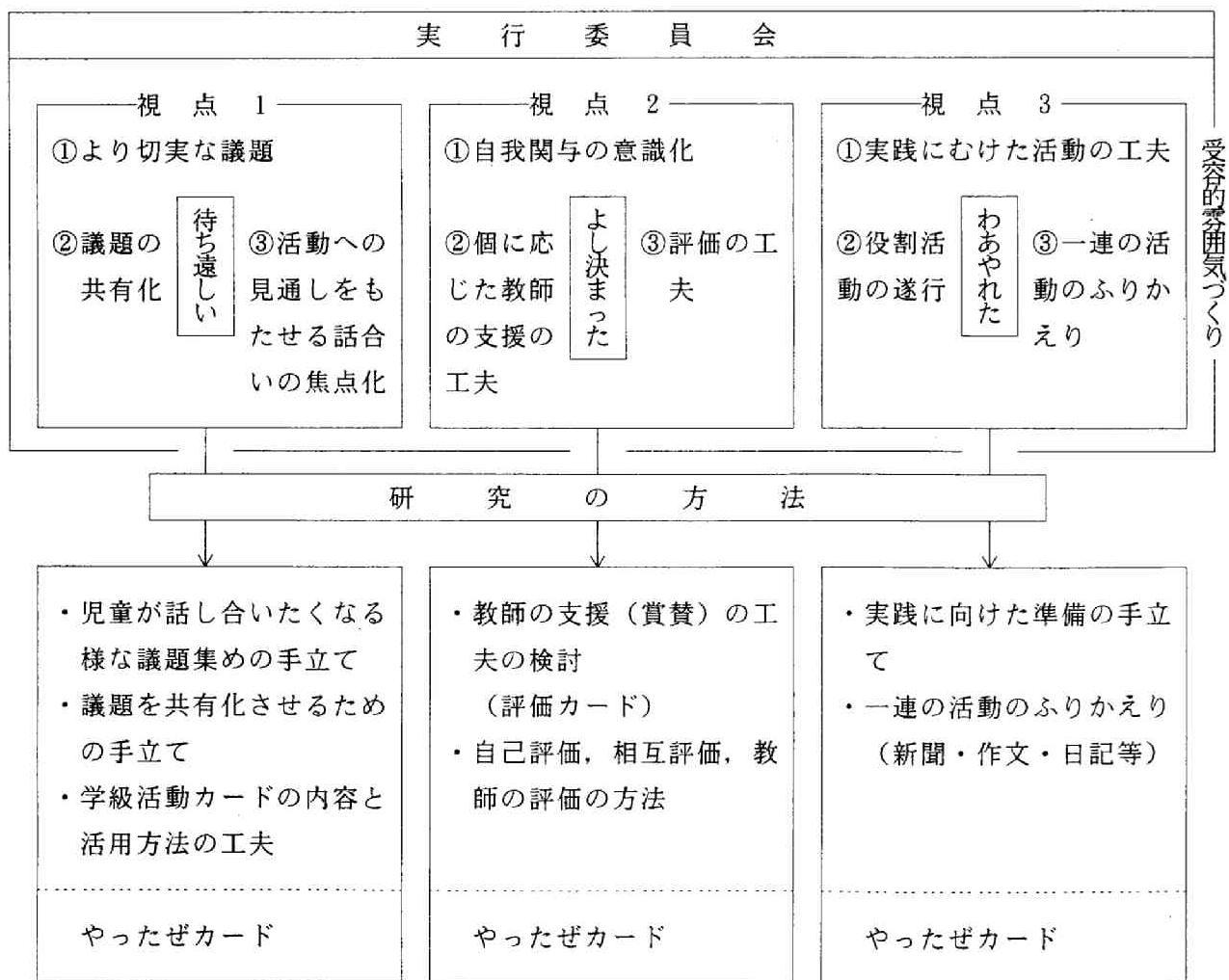
3 研究仮説と仮説検証の視点

研究仮説

事前の活動を充実させ、互いのよさを生かし合う話し合いや、満足感が得られる実践ができれば、次の活動への期待感が高まり、心おどる学級活動になるであろう。

《仮説検証の視点》

学級活動における場面ごとに心おどる状態を 事前「待ち遠しい」 話し合い「よし 決まった」 実践「わあ やれた」と、とらえた。



4 研究内容

(4) 視点1 「待ち遠しい」と期待感が高まる実践事例

6年議題「心おどるクラスのページになるような卒業文集の計画を立てよう」

<概要> 議題が児童にとって切実であり、議題の共有化や焦点化することは「話し合いが待ち遠しい」に結びつくのではないかと考えた。そこで、児童の内面を知る手がかりとして「やったぜカード」を作成した。一連の活動を6つの場面に分けて、一場面ごとに児童の内面を見つめさせ、カードに書かせた。議題決定の場面においては、「卒業までに学級としてどんなことをしたいか。あるいはどんなことをすればいいのか。」の投げかけで、多くの議題の中から決定した。カードには「よい議題に決まって良かった。燃えられそうだ。」等と書かれていた。話し合いの計画の場面においては、提案理由・めあて・話し合いの柱について実行委員会から提案され、みんなで確認しあった。「よし、これで大丈夫。」と全員が納得したところで、学級活動カードに一人一人自分の考えを書いた。その後、実行委員会はみんなの考えを整理し、提示したり印刷したりして個々が話し合いに臨みやすいように準備した。このような手立てをとったことによりカードには「どこにもない文集をつくってみせる」等が書かれ、どの児童からも「話し合いが待ち遠しいなあ」という強い思いが伝わってきた。

<考察> 「やったぜカード」を活用することにより、一連の活動の中のいろいろな場面での一人一人の願いや思いがよくわかり、支援しやすい。また活動を振り返り、次の活動へのステップに役立たせることができた。

(2) 視点2の③「よし 決まった」と満足感を得られる実践事例

5年議題「仲良くなろうパート2・給食の時のメンバーを決めよう」

<概要> 年度当初にクラスで話し合っただけで決めた学級の目標「仲良く助け合う」ということを実現するための1つとして、給食の時のメンバーを工夫することになった。仲良くなるためにはどんなメンバーがいいだろうか話し合う前に、司会者グループは、学級活動カードに記されたみんなの意見を分かりやすく、分類してカードにしておいた。また、教師も励ましの言葉を書き入れ、話し合いに生かされるようにした。友達の意見を聞くときに、うなずいたり同意であることを示したりして、誰でもが安心して意見が言えるようにすることの大切さも気づかせていった。話し合い活動の終わりには、学級活動カードに各自が反省を書くとともに、頑張った友達の名前を書かせるようにした。話し合い活動で目標とする項目を分かりやすく書き表し、それにそって反省するので、おのずと目標に沿って友達のいいところがみつけられた。

<考察> 事前に、司会者グループに学級活動カードに目を通させ、意見を整理させてから話し合いに臨ませると多くの意見が話し合いの場に出て、友達の考えがよく分かって話し合いが深まった。また、話し合いの過程で、話し合いにどうかかわったか見つけやすくするために、学級活動カードに反省する内容を項目として書き表しておく、評価がしやすくめあても立てやすかった。友達のいいところを発表し合うことで、友達のよさが分かり励みとなった。そして、一人一人が自信をもって話し合いに参加するようになってきた。

(3) 視点3の②「わあ やれた」と満足感を得られる実践事例

5年 議題「ゴーストスリラー館のお店をきめよう」

決まったことがなかなか実践されないという問題点を解決する方法の一つとして、話し合いが終わってから実践に向けた活動をさらに意欲的に行うための実行委員会を作った。

この委員会は、議題の収集から実践までの一連の活動を中心に行う委員会である。

<概要> 西亀子供祭りで兄弟学級である3年生と「ゴーストスリラー館」の出しものをするようになった。実行委員になった児童は、事前の活動では3年生の意見を聞きそれをクラスの児童に伝えるパイプ役になった。「3年生の考えも大切にしてみんなが楽しくなるお店を決めよう」という話し合いのめあても提案し、多くの賛同も得られた。話し合いにおいては、司会グループになり、学級会は、もちろんのこと学級会で決まらなかったことや、実践に向けて話し合わなければならないこと、確認しなければならないことを朝の会や帰りの会でも中心になって進めた。実践に向けては、各お店の準備の進み具合を確認する役割も果たした。進み具合を報告する会も中心になって行った。実行委員になった児童は、話し合ったことが成功するように自ら進んで活動しクラスのみんをリードしながら準備を進めた。

<考察> 実行委員会を作ったことによって、次のような成果が挙げられる。

- ・一連の活動を中心的作用で行うため、決まった内容がよく分かっていて、次に何を話し合えばよいか、実践にむけての必要な話し合いが期待できる。
- ・話し合いで決まったことが実践に向けて、準備が進んでいるか、その進み具合を中心となり把握するので実践への活動が明確になり、多くの児童の意欲が高まる。

5 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

- ①事前の活動（議題集め・議題の共有化・学級活動カードの活用）を充実させることにより、話し合いに見通しをもって臨み、話し合いを深めることができた。
- ②教師の評価、児童の自己評価・相互評価等の工夫をすることにより、児童の変容をつかみ次のステップに生かすことの大切さが分かった。
- ③実行委員会が、一連の活動（議題収集から振り返り）を中心となっていくため、実践への活動が明確になり、児童の満足感・達成感が高まった。

(2) 今後の課題

- ①教師の評価、自己評価、相互評価などの方法で記録された資料を、どのように生かし、次の活動に結びつけていくのか、さらに検討していきたい。
- ②実行委員会の充実のため、活動時間の工夫、見通しをもった計画、実行力をどう育てていったらよいのかを、考えていきたい。

V 全校児童の関心と参加意欲を 高める代表委員会の指導の工夫

(児童会活動分科会)

1 主題設定の理由

児童会活動のねらいは、「児童が、自分たちの学校生活を向上させようとする意図の下に、学校生活に関する諸問題を解決する活動及び学校内の自分たちの仕事を分担処理する活動を自発的、自治的に行うことによって、自主性と社会性を養い、個性の伸長を図る」ことにある。このねらいを達成するためには、児童会活動において、異なる年齢の児童が互いに協力して自分たちの生活の向上を目指していく体験的な活動が、重要な意義をもつ。また、代表委員会児童を含め、すべての学年の児童が、その学年段階なりに自分たちの児童会活動に関心を持ち、学校生活をよりよく、より楽しくしていくために進んで参加していくことが重要である。

しかし、実際には、代表委員をはじめとする一部の児童の活動にとどまることが多く、各学年の児童が、代表委員会の活動や自分たちの児童会活動について十分に理解しているとは言えない。本分科会に所属する研究員の学校において実態調査を行ったところ、代表委員会がどのような活動をしているかについて知っている児童は、高学年でも半数程度で、他の学年はかなり少なかった。また、代表委員になりたくない理由としては「大変だから。」「遊ぶ時間がなくなるから。」などの理由が多かったが、「どのようなことをするのか分からないから、なりたくない。」という理由を挙げる児童もいた。一方、児童会集会活動に対しては「楽しかった。」と答える児童が多いが、楽しくなかった理由として「毎年同じ内容でつまらない。」「見ているだけでおもしろくない。」という意見が高学年児童から出されていた。

以上のことから、児童会活動を活性化して児童の自主性と社会性を育てていくためには、児童会活動についての広報活動を充実して全校児童の関心を高め、各学年の児童の考えや願いを取り入れた活動を計画して全校児童の協力による活動を展開していくことが重要と考え、本研究主題を設定した。

2 研究仮説と仮説検証の視点

(1) 研究仮説について

児童会活動を活性化するためには、代表委員会の話合いを充実するとともに、全校児童の協力と参加を図っていくことが欠かせない。児童会活動についての各学年児童の理解が十分ではない実態を考えると、まずその活動について効果的に知らせ、全校児童の関心を高めることが出発点であると言える。そして、各学年児童の考えや願いを吸い上げて、全校児童の協力による活動を積み重ねることにより、参加の場面を増やし、みんなでやり遂げた成就感を持たせていくことが必要である。

以上のことから、次の研究仮説を設定した。

研究仮説

代表委員会において、全校児童に活動のねらいと内容を効果的に知らせ、全校児童の協力による活動を積み重ねることによって、意欲的な児童会活動となるであろう。

(2) 仮説検証の視点について

児童会活動に対する全校児童の関心と参加意欲を高めていくためには、まず、広報活動の充実が必要となる。代表委員会ではどのような話し合いをしているのか、児童会の各活動が自分たちの生活とどのように関わっているのかなどを効果的に伝えることが、全校児童の関心をもつことにつながると考える。また、児童会活動に対する活動意欲の持続や進展のためには、全校の児童の参加の場を増やしていくことが必要となる。自分たちの考えや願いの反映される活動、自分たち自身の参加場面のある活動であってこそ、みんなで協力してやり遂げる喜びも持てると言える。

そこで、次の2つの視点と手だてを設けて、検証を進めることとした。

視点1 全校児童の関心をもつ広報活動の工夫

- ・ビデオ、校内放送、児童集会等による効果的な広報活動
- ・代表委員会だよりや掲示板等の活用

視点2 全校児童の協力による活動の工夫

- ・事前や事後のアンケート等による児童の考えや願いの吸い上げ
- ・各学年段階に応じた参加の工夫
- ・異年齢集団活動の工夫

3 研究内容

実践事例1 広報ビデオ「みんなの児童会活動」

全校児童の関心をもつ広報活動の工夫

- ・ビデオ、校内放送、児童集会等による効果的な広報活動

<活動の概要>代表委員児童と担当教師によって、児童会活動についての広報ビデオを作成し、集会の時間に全校に放映した。内容は、「児童会活動ってどんな活動?」、「代表委員会の話し合いの様子」、「議題箱の紹介」などで構成し、実際の活動場面を映すとともに、イラストやBGMを用いて効果をもつようにした。

<考察>ビデオ視聴後のアンケート調査によれば、どの学年も、半数以上の児童は「(児童会の活動が)分かった。」という回答を示した。特に高学年児童からは「今まで代表委員会の仕事に分からなかったけど、このビデオで分かった。」「代表委員ががんばっているから、ぼくたちもがんばって、いい学校にしたいです。」などの感想が寄せられた。このことから、ビデオを通しての広報が、児童会についての全校児童の関心をもつことに役立つとともに、互いのよさを認め合い高め合う機会としても生かせることが確かめられた。

実践事例2 題材「みんなの願いが入った運動会のスローガンをつくろう」

全校児童の関心を高める広報活動の工夫

- ・ビデオ，校内放送，児童集会等による効果的な広報活動
- ・代表委員会だよりや掲示板等の活用

全校児童の協力による活動の工夫

- ・事前や事後のアンケート等による児童の考えや願いの吸い上げ

運動会は、学校行事の一つであるが、児童会などの組織を生かした運営を考慮し、児童の積極的な参加意欲をもたせることは大切なことである。特にスローガン作りは、全校児童の協力の態度を育て、運動会を成功させる雰囲気をつくる上で、有効な活動の一つである。そこで、広報活動を充実させ、アイデアやアンケートによる児童の考えの吸い上げなどを工夫した。

＜活動の概要＞ 全校児童の関心を高めるために、運動会キャンペーンビデオを制作した。このビデオにおいて、昨年度の運動会の映像と、運動会を盛り上げるためにスローガンを募集することを、議長団が説明した。これを朝の会の時間に流し、その場で各クラス担当の代表委員が、代表委員会だよりを配り詳しい説明をした。さらに、集会時の呼びかけや、児童会室前の掲示等を通して全校児童に分かるよう呼びかけた。そして、各学級から案を出してもらうとともに、議題箱で個人のアイデアを集めることにした。

出された案の中から、運営委員会で4つの原案にしぼり、代表委員会での話し合いを行った。「1年生から6年生までの全校の児童にとって、言いやすく覚えやすいもの」「みんなが力を1つにしてがんばれるもの」をめあてとして話し合いを行った。児童は、より良いものを作ろうとしてそれぞれの案から良いところを見つけだし運動会のスローガンを決定した。

そして、運動会当日までの広報活動として、決定したスローガンが全校で考え作られたものであることを意識させるため、代表委員会だよりで決定までの様子を知らせ、プログラムにスローガンを印刷した。ポスターの中にスローガンを入れ、昇降口にスローガンの掲示をした。開会式においては、代表委員が作った大きなスローガンを掲示し、全校児童が声をそろえてスローガンを読みあげ、発表の場を設けた。

＜考察＞ 事後アンケート（4年生以上）によると、キャンペーンビデオを見て、9割以上の児童が「スローガン作りに協力しよう。」と考え、2割の児童が「議題箱に自分の考えたスローガンを入れてみたい。」という結果が得られた。また、決定したスローガンについては、9割以上の児童が良かったと評価した。その理由として、「赤も白も優勝に向かってがんばれるスローガンだったから。」「学校のみんなが考えたから。」などをあげている。さらに9割以上の児童が「代表委員会は運動会を盛り上げる努力をしている。」と考えていたことが分かった。これにより代表委員も、「自分たちが相談したことが全校のスローガンとなり、学校の行事に協力できたという実感がわきとても良かった。」などの感想を持った。

以上のことから、運動会のスローガン作りにおいて効果的な広報活動と、アイデアや全校児童からの意見の吸い上げを通して、運動会が盛り上がり、全校児童の児童会活動への参加意欲が育ったと考えられる。さらに、代表委員の意識も高まるということが確かめられた。

実践事例3 題材「おもしろスポーツギネス大会をして全校で楽しもう」

全校児童の関心を高める広報活動の工夫

- ・ビデオ，校内放送，児童集会等による効果的な広報活動
- ・代表委員会だよりや掲示板等の活用

全校児童の協力による活動の工夫

- ・事前や事後のアンケート等による児童の考えや願いの吸い上げ
- ・各学年段階に応じた参加の工夫
- ・異年齢集団活動の工夫

児童会集会活動は、学校生活を一層楽しく充実向上させるために全校児童が集まって協力して行う活動である。昨年度は「遊びの広場」の中で、他学年とのかかわりを楽しみながら活動する児童の姿が見られた。今年度は、時間をあまりかけなくてもでき、児童が意欲をもって取り組めるものということで「おもしろスポーツギネス大会」を実施することになった。代表委員会としては、広報活動を工夫し、全校児童に内容を知らせると共に、他学年との交流を深めながら協力してやり遂げる充実感や達成感が持てる集会になるように計画を進めていった。

＜活動の概要＞ 集会の2時間枠を前半と後半に分け、店番（記録係）とお客さん（競技者）の役割を決めて交代し、低学年はお客さんの役割のみとした。「おもしろスポーツ」の種目を考え店を出すのは3年生以上の学年とし、各クラスからやりたい種目を募集し、掲示した。次に、希望のクラスが、中休みに校庭や体育館で試しにその種目を行ってみる期間を設け、これをギネス広場とした。この活動を通して、クラスで取り組みたい種目のイメージを深め、準備や内容、他学年への配慮など、具体的な計画が立てられるようにした。

代表委員会の話合いにおいては、ギネス広場での反省を生かして種目や場所を決定し、スタンプカードの形式や、当日に楽しい雰囲気を作るための工夫等を話し合った。そしてスポーツギネス大会の前日に「いっぱい来てねアピール集会」を実施し、各クラスの種目の紹介や宣伝を実演つきで行い、児童の期待感を高めるようにした。

当日は、2年生の歌うテーマ曲や、代表委員による記録や混み具合についての実況中継が放送によって流れる中、スタンプカードを手にした児童が次々と種目を回っていく姿がみられた。

＜考察＞ 事後アンケートの結果、「おもしろスポーツギネス大会」について楽しかったと答えた児童は91%に達した（まあまあ楽しかったと答えた児童を含む）。楽しかった理由としては、「スプーンレースやくつとばしなどおもしろい競技ができた。」、「お客さんがたくさん来てくれてうれしかった。」「いっぱい体をうごかせた。」など、活動内容の楽しさや多くの児童に来てもらえたうれしさなどが表されていた。一方、広報活動に関する質問においては、代表委員の説明によってスポーツギネス大会の内容を理解した児童が多く、それに次いで先生の話、前日の集会が、活動を知らせるために効果的であったことが示された。

以上のことから、児童会集会活動を実施するに当たって、代表委員会として広報活動を工夫して活動内容を全校児童に知らせ、児童の考えや願いを集会の計画に生かしていくことが、協力してやり遂げる充実感や達成感につながっていくことが確認できた。

4 まとめと今後の課題

児童会活動分科会では、全校児童の関心と参加意欲を高めるために代表委員会を通し、どのように活動を工夫していけばよいのかを、次の2つの視点を通して研究を進めてきた。本研究から、主に以下の点が明らかになった。

(1) 研究の成果

視点1 全校児童の関心を高める広報活動の工夫

- ビデオや校内放送、児童集会等を利用して広報活動を充実させることにより、全校に代表委員会の活動の様子を知らせることができ、児童は代表委員会を身近なものとして感じることができるようになってきた。特に、昨年度の活動の様子をビデオ等で見せ、呼びかけを行うことによって、児童ははっきりしたイメージをもって取り組むことができ、有効であった。
- 代表委員会だより・校内放送・ポスター・掲示板などの活用により、低・中学年児童は代表委員会活動への関心が増し、高学年児童は活動の成功に向けて、意欲的に関わる児童が増えた。

視点2 全校児童の協力による活動の工夫

- 全校児童の考えや願いを吸い上げ、計画段階において個人や学級で話し合った意見を生かすことにより、意欲をもって活動に参加することができる児童が増えた。
- 各学年の発達段階に応じた参加の仕方を工夫し、異年齢集団活動を取り入れていくことにより、参加意欲が高まり、全校児童の協力でやり遂げたという満足感をもつことができた。
- 事後のアンケート等で活動の見直しをすることにより、次の活動へ積み上げていくことができるようになり、よりよい活動にしていこうとする児童の意欲が育ってきた。

(2) 今後の課題

- 全校児童に活動の様子を知らせ、関心意欲を高めていくためには、代表委員会だけでなく他の委員会にも協力してもらう必要があることに児童が気付き、委員会との連携を深めていけるようにすることが必要である。
- 学校週5日制に関連し、時間の確保が難しくなっているが、限られた時間内で、児童が自主的・実践的に活動していけるよう活動内容を精選し、活動時間を工夫していくことが大切である。
- 全校児童の関心を高め、意欲的な児童会活動にしていくためには、教職員の共通理解による協力体制が重要な基盤となる。望ましい児童会活動の在り方を共通理解し、全職員が協力して支援していくことが課題である。



VI 「やって良かった」と思える学校行事の工夫

(学校行事分科会)

1 主題設定の理由

学校週5日制実施にともない、学校行事の精選が叫ばれている今日、学校行事のもつ教育的価値を明確にするとともに、児童が主体となって参加し、満足感・充実感を味わえる行事へと見直しをしていく必要がある。

学校行事分科会では、児童自身の「やって良かった」という気持ちに焦点をあて研究を進めてみようと考えた。児童が行事に参加することによって、「やって良かった」という満足感・充実感・成就感・達成感・信頼感等をもつことにより、児童がより主体的、意欲的に行事に参加するようになると考えたからである。児童が「やって良かった」と思えるような支援を、学校行事の様々な場面で工夫していくことにより、「やらされている」のでもなく、惰性でやっているのでもない、児童自身が主体的・意欲的に参加する学校行事になると考え、本研究主題を設定した。

2 研究仮説と仮説検証の視点

(1) 研究仮説

行事のもつねらいを明らかにし、事前・活動場面・事後の指導過程において児童一人一人が満足感・充実感・達成感・信頼感等のもてる支援の仕方を工夫すれば、児童が自信や次への期待感をもち、主体的、意欲的に参加するようになるだろう。

(2) 仮説検証の視点

その気にさせる支援

(意欲をもたせる)

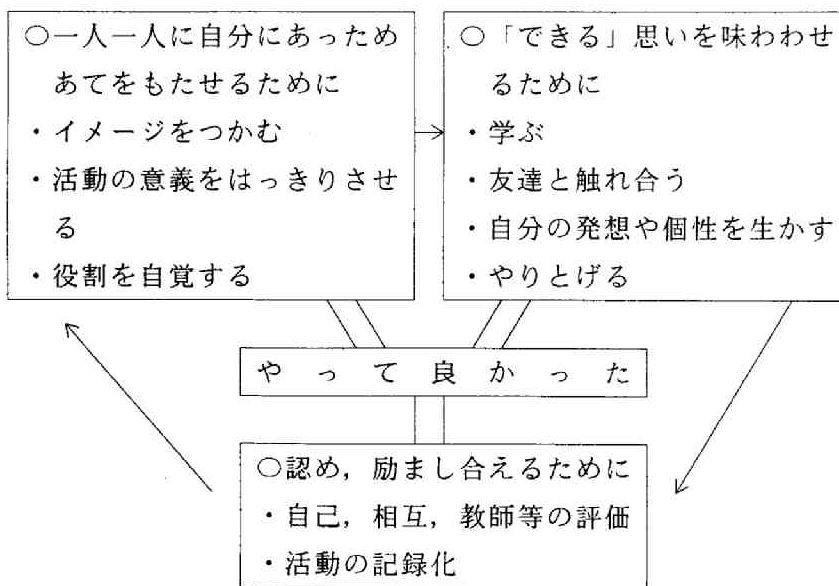
夢中にさせる支援

(気持ちを高める)

仮説検証の視点として左記のような「基本的な支援

のモジュール」を設定した。各行事の事前、活動場面、事後の指導における支援を、「その気にさせる支援」、「夢中にさせる支援」、「満足させる支援」の三段階にわけてとらえた。

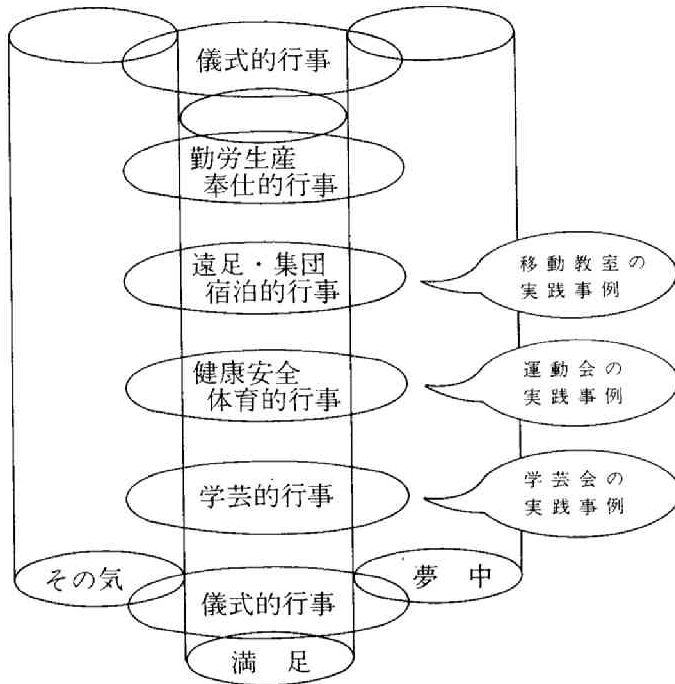
三段階の支援によって児童は、「やって良かった」という満足感・充実感・成就感・達成感・信頼感等をもち、学校行事に主体的、意欲的に参加するようになると考えた。



満足させる支援

(自信と期待感をもたせる)

関 連 図



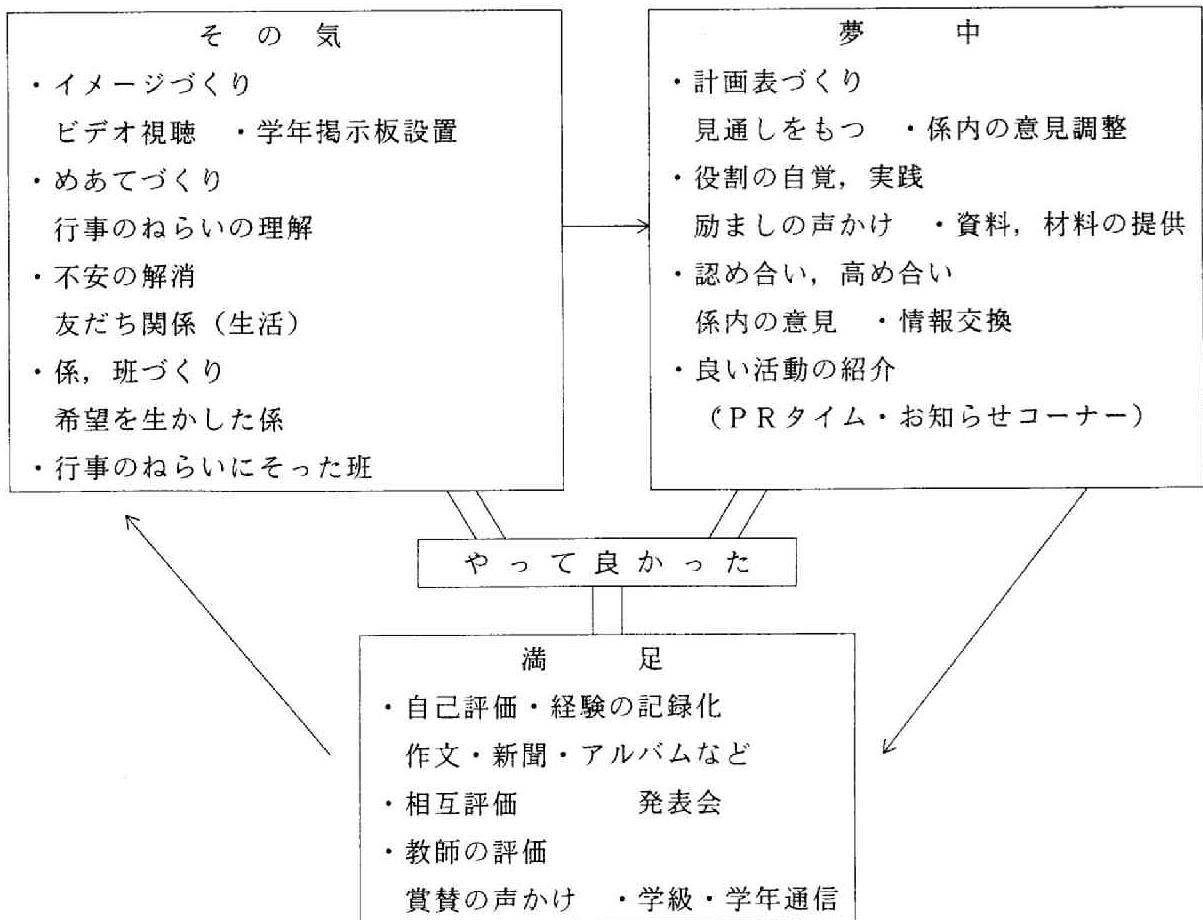
この関連図は、一つ一つの行事が単独で終結するのではなく、一つの行事で得た満足が次の行事のその気につながっていくことを表している。

例えば、6年生でいえば、5年の時の卒業式に始まり、6年生としての自覚をもつ始業式や入学式。夢中になって活動する運動会や学芸会、移動教室などを経て満足感を持ち、卒業に対する自覚と心構えを育てていく。

一つ一つの行事でのその気、夢中、満足の積み重ねが、卒業や学年終了の時の大きな「やって良かった」につながるのである。

3 研究内容

(1) 実践事例 遠足・集団宿泊的行事（移動教室）



①行事の特性

- ・人間関係を深め合う。
- ・自分たちの計画にしたがって、活動を創意・工夫する。
- ・自然とのふれ合いをもつ。

②研究内容

その気 → 夢 中 → 満 足 → という具体的支援のモジュールにのっとり活動を行った。以下は、各指導過程における教師及び教師相互の協力による支援の具体例である。これらの活動を通して、計画・準備に取り組み、当日も主体的・意欲的な活動がみられた。

③指導計画

第1次 <その気にさせる支援> 視聴覚情報から移動教室の全体イメージをつかみ、児童一人一人が自分のめあてをもつ。
<ul style="list-style-type: none">・オリエンテーションをする。(ビデオ視聴後、自分のめあてをたてる)・係・班づくりをする。(係の希望を決めてから、班をつくる。)
第2次 <夢中にさせる支援> 気持ちを高める活動を展開。めあてを拡大、精選、さらに進化させる。
<ul style="list-style-type: none">・係の組織と仕事の確認をし、めあて・計画をたてる。・一人一人の役割を確認し、計画に基づき準備する。・前時からの活動を継続し、次時の発表の準備をする。・各班・係の相互交流により、活動報告と情報交換する。・移動教室の事前指導をする。 (健康状態、持ち物、約束、班・係の準備の確認をする。)
移 動 教 室 当 日 の 活 動
第3次 <満足させる支援> やって良かった活動、行事の成果から、児童に満足感、成就感、達成感を味わわせる。
<ul style="list-style-type: none">・経験を記録として残す。・児童一人一人、班、係の感想をまとめ。・「移動教室の発表会」を開く。

④ 考 察

学年掲示板を設け、行事のめあてを掲示するとともに、個人のめあてをカードに記入し掲示したことにより参加意欲が高まった。

計画カードに活動内容を記入し、見通しをもって準備・計画を行う中で、班、係相互の意見交流により創意・工夫された意見や活動が生まれるなど夢中に取り組むことが、今回の指導を通して確かめられた。



また、指導過程を明らかにし、その各段階で、学年を単位とする指導を取り入れたことにより、学級という枠がなくなり、児童は学年として互いのよさを生かし、認め合い、高め合うことの大切さを実感した。それらの活動を通して得た経験を新聞等に記録化することで、児童はより満足し、以後の学校行事への期待感を高める。

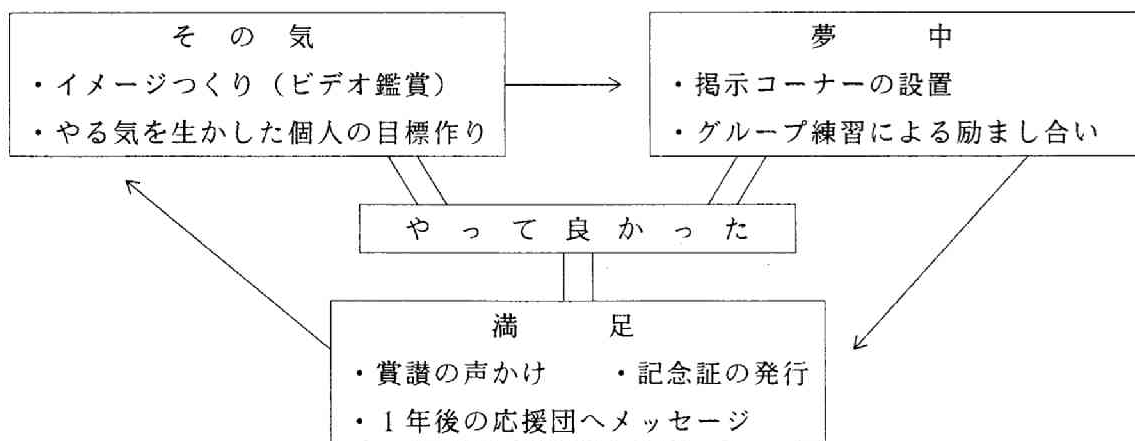
さらに、具体的な支援の内容を掲示することにより、教師間の共通理解を促進させ、詳細な指導内容を系統的にすすめることを可能にし、多種多様である地域や学校の実態に応じた支援を工夫するときの観点を明示できた。

(2) 実践事例 健康安全・体育的行事（運動会・応援団）

① 行事の特性

- ・会場の実情に合わせて、危険防止を第一とした計画、運営をし、その中に児童の自主的参加の機会を与えて自主性を育て、全児童に所属感をもたせる。

② 研究内容



③ 考 察

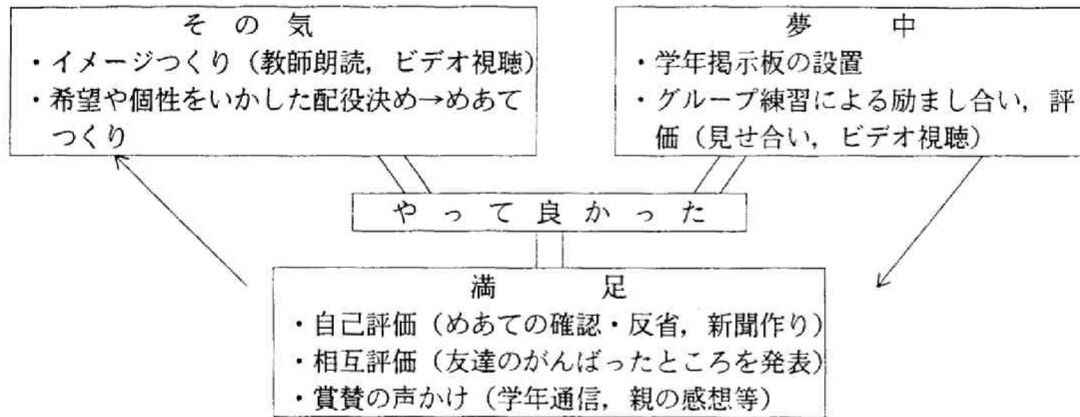
- ・結団式では活動に見通しを持たせた結果、意欲的なスタートを切ることができた。
- ・練習計画をあらかじめ印刷して配布し、団長を中心に活動できるように支援した。
- ・創作活動は児童の主体性を生かすように担当者は紅白に二人ずつ補助についた。
- ・運動会を終え、友達から「来年は僕も応援団にはいりたいな。」などと声をかけられ、応援団の児童も自分たちの活動に自信を持ったようである。

(3) 実践事例 学芸的行事（学芸会・高学年）

① 行事の特性

- ・児童の自主性と創造性を高める表現活動，体験的活動とする。
- ・向上意欲を高め，成就感を感得させ，児童の心に残る行事とする。

② 研究内容



③ 考察

- ・ビデオ視聴等をするにより，劇全体のイメージをつかむことができた。
- ・グループに分かれての練習，相互の演技の見せ合いを通して，児童はより良い演技を工夫しようとする意欲を高めていった。
- ・がんばったことへの評価，演技への賞賛をもらうことにより，満足感を得た。

4 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

各行事特性に適合するモジュールの設定を試み検証してみた。その結果として，その気にさせる支援・夢中にさせる支援の重点の違いが大きい行事や，それぞれの支援の重複化が必要な行事等があるということが分かった。一例として，遠足・集団宿泊的行事においては，始めから意欲が盛り上がった気持ちの子どもたちには，その気にさせる支援よりも夢中にさせる支援によって意欲の継続化と段階的な高揚を果たす支援が必要であることが分かった。検証の課程で具体的に明らかになったことは以下の通りである。

- ・学年掲示板の活用によって，行事のめあてをふまえた個人のめあてや学年のめあてを掲示することで意欲の盛り上げができた。また，個人や係の交流を活性化させることにも役立った。
- ・一人一人に応じた支援の具体化によって全体の成功感・成就感の盛り上げが図れた。
- ・「やって良かった」という声が児童の中で多く聞かれるようになった。

(2) 今後の課題

支援のモジュールが果たす効果を実証することは，まだ充分とはいえない。具体的な支援と児童の活動の変容については今後の検証の積み重ねが必要であり，より具体的な支援に改めていく必要がある。また，行事の精選に関連して，行事の教育的意義にそった指導の系統化を明らかにしていくことが重要である。